

維摩經における佛性思想の特質

橋 本 芳 契

維摩經は、中國の判教において抑揚教、つまり小乘を抑止（抑小）し、大乘を擧揚（揚大）する趣意のものとして見られた。^①この經の弟子品（英譯は聲聞品）第三等を中心として考えれば、たしかにこの見方には一理ある。すなわち、弟子品では舍利弗（智慧第二）をはじめとする十大弟子は、五百の聲聞の代表として、各自に會て維摩詰にその力量の不足にして證悟の未熟なるが故に彈呵された思い出を表白するのであるが、それはまさに「抑小」の表示と稱してよい。そして抑小の反面が當然大乘の賞嘆たる「揚大」であつたこと亦言うまでもない。維摩詰と文殊師利とが大乘の立場を代表するものとして實際に登場するのは問疾品（謙譯は諸法言品）第五にいたつてであるが、舍利弗の方はすでに經初の佛國品（英譯は序品）から登場している。什英兩譯が舍利弗の三度目の登場をもつて不思議品第六をはじめに對し、支謙譯はその箇所までを第五品（諸法言品）におさめる差があるが、そこでの舍利弗は大眾のために床座を念じ、これまた求法懈怠で維摩

詰に呵せられるのである。このあと香積佛品（英譯香台佛品）第十にいたり、同じく大眾のために食事を念じて呵せられる場合も、一貫して維摩經における舍利弗は小乘の智慧の有限・相對、つまり有所得なものであることの代辯者の役割になつて登場している。文殊師利が大乘の智慧者で現われるのはそれに對する大きな逆切であり皮肉である。佛國品の場合は、「ボサツの淨心によつて佛の淨土が得られる」と聞いた舍利弗が心に、「釋迦佛のこの土が穢惡充滿しているのは、もとボサツであつたときのその心の不淨からか」と疑う役割であつたが、觀衆生品（英譯は觀有情品）第七では、天女との對論者として登場し、これまた小乘人の有分別・有所得の見解を破られるのである。他には菩薩行品第十一や見阿閼佛品（英譯は觀如來品）第十二にも登場するが、これらは比較的に軽い役である。以上小乘の代表者中の代表者として舍利弗が維摩經に出てくるすべての場合を一應列擧したのであるが、他にいまひとり小乘人として登場し、しかも教理思想的意味

においては舍利弗にまさるとも劣らぬ重要さをもつて活躍している人物がある。それは、ほかならぬ大迦葉である。大迦葉はこの經には前後三回にわたつて登場する。第一は、弟子品において舍利弗の次に目連（神通第一）が登場したあと、第三の佛命（維摩詰問疾の）拜受者として舞臺にのぼる場合である。彼は十大弟子中では頭陀第一とされる。維摩詰に呵せられた理由も、「或時、貧しき村落に行乞せしとき、……大衆生家を去り貧しき村落に來るは尊者大迦葉の慈悲が一端にかたよれるなり」（多田等觀譯『西藏譯維摩經』²⁴（參照）等の述懐と維摩詰の非難のことばにあるごとく、頭陀を行じながら、しかもその有分別、差別の見解にとどまつたことにある。いまは便宜、引きつづき藏譯によつてその箇所を紹介すると、「佛の種姓を以て汝、村落に入るべし」（同上²⁵）のごとき漢譯には對應句を缺いた佛種性を明確にする一節さえ見いだされるのであり、その點をこそ教理思想的に重要でないかと指摘したのである。そこには單にさきの舍利弗と同列に「抑小」としてのみ解し得ない大乘義、とりわけ成佛に關する思想的な深まりが反映している。ついでながら、直前の目連段の末節にも、漢譯では、「善く、知見に於て罣礙する所なかれ。大悲心を以て、大乘を讚え、佛恩を報ぜんと念じ、三寶を斷ぜず、然る後、說法せよ」（羅什譯）とした箇所があり、それに對應する藏譯は、「知慧の眼を以てよく見るべし。

大慈悲を現行すべし、大乘を讚嘆すべし、佛に奉事し報ずべし、觀念を清淨にすべし、法の決定せる語を知りて三寶の種姓を斷たざるがため、汝が說法を爲すべし」（前掲書²⁶）で、そこには「三寶の種姓」*triratnayamā*と²⁷いっている。しかるに、大迦葉が登場する第二の場合、さきの舍利弗の求座の念ではじめられた箇所の引きつづきに不思議品第六において、ボサツの不可思議解脫が維摩詰によつて縷々のべられるのを聽聞した大迦葉が、自ら希有の思いをなし、舍利弗とのあいだに語り合いをなして、聲聞緣覺の二乘（小乘）すべては盲者のごとく無眼で、不可思議の一因さえ現見できないから、到底、發ボダイ心のごときはかなうものでない、「根は衰へ、種子は焼け腐れたるが如く、この大乘の機たらざらんものには何をか云はん」とし、「一切の聲聞・緣覺がこの說法を聞きて號泣してその聲、三千大千世界に聞こえたり」（以上前掲書²⁸）と小乗人の悲歎述懐の狀が記されている。維摩詰はこれに對し、「十方無量の世界に於て總ての惡魔が魔行を爲す。彼等總ての者も解脫不可思議に住せる菩薩衆なり」（同²⁹）として、住不思議ボサツの方便力を語つたものであり、さらに第三の場合は、佛道品（支謙譯は如來種品、玄奘譯は菩提分品）第八に三段あるうち、その中段において、文殊師利の「如來の種」もしくは「ボダイ分」に關する說を聽聞して、このたびは文殊師利にむかい、「煩惱は如來等の

種姓なり。吾等如きは菩提心を起し、若しくは佛法に於て現に究竟成佛は不可なり。五無間業を犯せる者は發菩提心を爲し能ふなり。佛法に於て現に究竟成佛も可能なり。譬へば不具なる男子に於て五欲はその功德なく功能もなきなり。その如く、一切の結を遮せる聲聞に於ては一切佛法の功德はなく功能もなきなり。この外の能縁も不可能なり。文殊師利よ、斯くの如きが故に、凡夫等は如來に對して恩を報ずるも、聲聞は恩を報ぜず。その故如何といふに、凡夫は佛の功德を聞きて三寶の種姓の相續を斷ぜずして奉事するが故に、阿耨多羅三藐三菩提に發心すと雖も、聲聞は終生に於て佛力と無畏等を聞くと雖も、阿耨多羅三藐三菩提に發心することは不可能なるが故なり」（前掲書 p. 35）と且は大乗を讃嘆し、且は聲聞（小乘）を悲歎している。そして、この最後のものにもさきの目連段におけると類同した經句として、「如來に對して恩を報ずる」こと、「三寶の種姓を斷ぜずして奉事する」こと等が大乗ボサツ道の眞特色としてのべられたことはやがて維摩經の佛性思想を明確に表示したものとして最も注意すべきである。念のためのべると、羅什譯が「佛道」と譯した第八品が、支謙譯では「如來種」、玄奘譯では「菩提分」の品題（チベット譯でも「如來種姓」品）となつてゐるのは、この品の初段が佛道に到達したボサツの果徳をのべ、中段がその佛道への因位としての如來種姓やボダイ分を説き、さらに後段

が方丈の座衆中のひとり普現色身ボサツの請いに應じて維摩詰がその身上や行狀、所持物等を、しかも歌の形で語つたにつき、各譯本で着意するところが異なつたからである。しかも、右三段中、初段は文殊の問い、維摩の答えとなり、中段は反對に維摩の問い、文殊の答えとなつてゐることは一體なにを示すであらう。さきに文殊師利は大乗人の智慧を代表するとのべた。その文殊が、如來種つまり佛性 *buddhagotra* は煩惱のほかにないという極端な發言をなしてゐる。また目連段における維摩詰の説法論にも共通して、如來への報恩や三寶種姓 *triratnagotra* の相續不斷を強調している。いな、それらはいわゆる對機說法であつて、維摩詰に對する目連も、文殊師利に對する大迦葉も、ひとしく小乘聲聞の側に身をおく佛弟子ではありながら、維摩や文殊の彈呵や說法に即して小乗の機根を反省し悲歎述懐し、やがて大乘の證悟に到達する趣意を存したものであるに相違ない。文殊に對する維摩詰の大乗佛教における教理的象徴的地位やその意味は方便心にして論ずれば、舍利弗よりも大迦葉もしくは目連の方が以上見たように報佛恩や不斷三寶に親しい佛弟子として語られた理由は、具體的には「神通」や「頭陀」が佛教教團全體の擴充的發展のうえにおいて最早思想的普遍的意義をうしなひ、むしろ凡夫本位の宗教的靈性的自覺にもとづけて廣域社

會における佛教の實踐實證がいそがれたことの個性的表明が實に西紀前後におけるこの維摩經の成立であつたと言えるのではないか。その點において、維摩經には、さかのぼれば素材的に小乘『涅槃』つまり『遊行經』につらなるものをもちながら、發展的には大乘『涅槃』の悉有佛性義、もしくは『勝鬘』の如來藏義にまでいたろうとする概のあつたことが深く注意される。舍利弗や目連は釋尊に先立つて入滅したが、あとにのこつた大迦葉のごときは、曾て釋尊に半座を分たれたと傳説されるほど信任された佛弟子であつた。釋尊なきのちの佛教敎團は、まさに彼の全責任において護持されてきた。佛滅後第一回の結集も彼の手によつて行われてゐる。三寶の種姓相續までが繰返しのべられる維摩經のごときは、初轉法輪經の藏した歸依三寶の精神の擴充であり發展であつたとしてよく、その佛性思想の特質は一に小乘人の悲歎述懷に相即する凡夫直入の頓悟を強調したところにあり、これによつて禪の方面でも念佛の方面でも、ひとしくこの經がもちいられた理由や原因も明らかにされるわけである。單なる抑揚敎による見方は維摩經に關する限りどこまでも皮相的一面的であつて實際は佛性思想ごとき方面の敎理的特色にこの經の本質があつたのである。

1 劉宋の慧觀の五時説では、ボサツのための頓敎(華嚴經)と聲聞緣覺等のための漸敎を分け、後者に三乘別(阿含經)三乘

維摩經における佛性思想の特質(橋 本)

通(般若經)抑揚(維摩經・思益經)同歸(法華經)常住(涅槃經)の五敎をかぞえた。抑揚敎は褒貶抑揚敎ともいう。

2 C'est en pensant pénétrer dans la famille du Buddha (Buddhagotra) que tu dois entrer dans les maisons (grha). L'Enseignement du Vimalakirti par É. Lamotte, 1962, p. 152.

3 Puis par la vision correcte de l'œil de la sagesse (prajñā-cakṣuṣ-saṃdarśana) qui ne connaît point d'obstacles (pratigha), en te rendant présente la grande compassion (mahakarūṇāsaṃmahībhāva), en faisant l'éloge du Grand Véhicule (mahāyānavarṇana), en reconnaissant les bienfaits du Buddha (buddhe kṛtjñatā), en purifiant tes dispositions (āśayaśiḍhana) et en pénétrant le langage de la loi (dharmaṃrūṭikaśālya), tu dois prêcher la loi afin que la lignée du triple joyau (triratnaṃśa) ne soit jamais interrompue (samucchinna). (ibid. p. 149) 謙・什兩譯には單に「三寶」とあつたものが英譯には「三寶の種」となり、藏譯に最も近い。

4 親鸞に「愚禿悲歎述懷」十六首がある。その第十三首に、「無戒名字の比丘なれど、末法濁世の世となりて、舍利弗目連にひとしくて、供養恭敬をすゝめしむ」とある。

5 佛國品嘆佛偈に、「三轉法輪於大千、其輪本來常清淨、天人得道此爲證、三寶於是現世間、以斯妙法濟群生」とあり。

6 十七條憲法第十條に「共是凡夫」とあるのは『維摩經義疏』(聖德太子)の總序の「大悲無忌」に照應して理解さるべきである。〔昭和四十年度文部省科學研究費による綜合研究成果の一部〕